

派遣者番号	R5K15	氏 名	久保田 美智子
研究主題	高等学校「言語文化」における現代文と古典を融合した指導について		
派遣先大学	東京学芸大学 大学院	指導担当者	中村 純子
所属	都立芦花高等学校	所属長	松田 晴美

キーワード：言語文化 現代文 文学的文章 古典 概念的理解 比較分析

要旨：本研究では、科目「言語文化」における古典と近現代の文学的文章を融合した指導方法について、「関係概念」としての古典観を踏まえ、概念的理解と比較分析に焦点を当てて授業を構想し、これらの有用性を明らかにすることを目的とした。先行研究を基にした授業実践により、比較分析、概念的理解を基本とした指導は、典拠と翻案といった直接の関係性が存在しない古典と近現代の文学的文章についても接続を可能とする手立ての一つであることを明らかとした。更に教材の発展化として作品を統合するテーマを設定することにより、現代の事象とのつながりをも見いだし得ることが確認できた。また段階的な比較分析を支援するため、学習者同士が交流しながら記述できるようにするための手だてを考案した。

高等学校「言語文化」における現代文と古典を融合した指導について

1. 研究の背景と目的

平成 28 年の中央教育審議会答申は、高等学校国語科の課題として「教材への依存度が高く」「講義調の伝達型授業に偏っている傾向」を指摘している。特に古典教育については「日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中で生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」ことについても言及されている。また現在は平成 30 年告示の学習指導要領が年次進行で始まっており、高等学校国語科の必修修科目が「国語総合」から「現代の国語」「言語文化」となり、古典は「言語文化」の中で近現代の文学作品と共に扱われるようになったが、生徒の古典嫌いや興味・関心の低さは変わらず取り沙汰され、「言語文化」の指導は十分に確立されていない。

こうした現状を踏まえ、本研究では高等学校国語科の必修修科目「言語文化」において、古典と近現代文学を融合した指導方法として有効な手立ての一端を明らかにすることを目的とした。中でも文部科学省が導入を進めてきた国際バカロレア(以下IB)の概念や探究、比較分析の指導を一条校における古典と近現代文学との接続に活用することの有用性に焦点を当てて研究を行った。

2. 研究の方法

基礎研究	授業実践	成果の分析
・戦後からの古典観と学習指導要領における古典指導変遷の整理 ・IB における概念的理解や探究テーマ、比較分析の研究 ・古典を比較する先行実践の研究 ・ICT 機器プリント活用方略の検討	①短編の組み合わせ ・兼好法師『徒然草』第 236 段「丹波に出雲といふ所あり」 ・星新一『ボッコちゃん』「来訪者」 ②長編の組み合わせ ・『謡曲集』『説経節』 ・三島由紀夫『近代能楽集』 ・夏目漱石「こころ」	・生徒記述、国語科教員記述、IB 校教員等記述と感想の分析 ・本研究の成果と課題の検討

3. 研究の成果と考察

(1) 基礎研究より

IBにおいて指導の基本となる概念とは「アイデンティティ」や「関係性」といった、より高次の抽象化されたものであり、これをハブのように用いて知識、事実、主題等をつなぎ、体系化することによって、各教科を横断的に学ぶことが可能となる。授業において学習者に身に付けさせたい、普遍的で汎用性ある探究テーマを理解する足掛かりとなるものである。古典と近現代という時代を超えた接続にも、概念を活用できると仮定し授業実践に取り入れることとした。

さらに益田(1975)、渡辺(2018)の「関係概念」の古典観を踏まえて、古典の読みには学習者の積極的な関わりが必要であり、そのためには授業において協同化、発展化が求められることが分かった。そのため、古典に対する読みがより深まるように、比較分析においては意見交換等による協同化、分析を統合した上で身近な事象や作品を考察するという教材を発展化する活動を設定した。

(2) 授業実践より

① 古典と近現代文学の接続

これまで古典と近現代文学の比較として多く実践されてきた典拠と翻案という明確な関係性をもつ作品の接続ではなく、兼好法師の『徒然草』と星新一の「来訪者」といったそれぞれが独立した

一個の作品でありながらも、概念を基本とした指導を活用して作品を見ることにより、比較分析の実施とそれを受けたテーマ設定ができ、一見関係性のない作品同士をも関連付けることが可能となった点が成果である。

近現代の文学テキストを足掛かりに古典を分析することで、古典を「過去の作品」として見るのではなく、現代に通ずる作品や自分とつながりのある作品としてこれまでとは違った視点で捉えることが可能となった。従来の講義調の伝達型古典教育から一步脱することができたと考える。

②思考ツール活用の有用性

古典と近現代文学を融合した指導は、作品間に常に明確な関係性があるわけではないことから、学習者がテキストをどのような観点で比較し、統合するかということが重要であり、ここに支援の仕組みが必要となる。本研究では支援の一助として、思考ツールとなる図1「比較分析表」やベン図を作成し、学習者の考察を促した。実践研究においては作品の基本情報と分析の観点を記入した上で学習者に提示した。個人で比較分析を実施した上で意見交換を行い、ベン図を使用し協同で分析を進めて比較分析を統合した上で、最後に総括的課題として、そのテーマで現代の事象やその他の文学作品の考察を行うよう、思考ツールを段階的に設定した。思考ツール活用の際には比較分析表の観点等に思考が引き寄せられてしまう点に留意する必要があり、生徒の学習到達度に合わせて、観点と内容の記載を調整することで活用がより効果的になる。

比較分析表		
資料名称「楽府集」「月夜に出る」という所あり	作品名	題名「楽府集」
	成立年代	作品の 基本情報
	舞台設定	
	登場人物	
	あらすじ	
作品を 見取る観点	時間空間	比較分析を 統合
	共同体	
	権力(権威)	
	文脈	
	コンテクスト 主題	
2作品から導き出されるテーマ 人は…		

図1 比較分析表

③学習者の古典に対する興味・関心向上の可能性

テキストの読解にとどまらず、古典と現代のつながりとそこから現代の事象を考察する総括的課題に取り組むことで、古典の学習が古典教材の読解に終わらず、学習者自身とつながっていることを感じる事ができたという感想が得られた。意見交換への積極的な参加姿勢も見られ、学習者の興味・関心が向上したと考えられる。

4. 課題と展望

今後の課題はテキストの選択方法である。古典と近現代文学を融合する指導においても、教科書から選択できるのが望ましいと考えるが、現行の教科書はそういった視点では作られていないため、結果として教員が教材を探すことに時間を費やさなければならない点が課題である。本研究においては教科書非掲載の作品も使用していること、実践が2例に留まっていることから、教科書教材での実践が十分検証されているとはいえない。また総括的課題の設定は行ったが、その評価を研究に含めることができなかった。言語文化は必修科目であるため、多くの生徒の評価を行うことが必要であり、この点についても検討を要する。

いずれの課題も本研究が汎用性を持つためには解決しなければならない点であり、今後継続して方策を探る必要がある。

5. 参考文献

益田勝実(1975)「古典文学教育でいまなにが問題なのか」『季刊文芸教育』14 明治図書

渡辺春美(2018)『「関係概念」に基づく古典教育の研究—古典教育活性化のための基礎論として—』溪水社